

出てきた。塔身・露盤・請花の形態は古調で、全体的に重厚豪快な鎌倉時代の逸品とされる。

五輪塔

- 例 1** 西國寺三重塔脇五輪塔
(西久保町、鎌倉後期～南北朝、総高：2.9m)
花崗岩製。杉原氏墓との伝承あり。



- 例 2** 尾道市重要文化財 福善寺五輪塔 (2基)
(鎌倉後期、総高：2.67m、2.68m 以上)
木梨杉原氏の配下、持倉氏のうち持倉則秀・則保父子の墓との伝承あり。



- 例 3** 広島県重要文化財 光明坊金銅有頸五輪塔
(瀬戸田町御寺、平安～鎌倉、総高：6.45m)

金銅製。空輪部の先端は尖っており、火輪部の頂部には方形の露盤が設けられている。水輪部は有頸、地輪部は極端に低い形となっている。石造五輪塔の初期の形式を考える上で参考となる。

- 例 4** 光明坊五輪塔群
(瀬戸田町御寺、鎌倉後期～江戸前期、
総高：1.5m)

寺伝によると、後白河法皇の皇女・式子内親王は、出家し法名を如念と改め、今出川左大臣の娘松虫と鈴



虫とともに来島し、光明坊で一生を過ごした。また如念の師である法然上人も、讃岐に流される途中に同寺を訪れている。法然上人塔・如念塔は鎌倉後期、松虫・鈴虫塔は南北朝～江戸前期のものとされる。

一石五輪塔

例1 浄土寺長足五輪塔（五輪卒塔婆 2基）

（東久保町、弘安頃（1278～1286）、総高：2.54m、2.18m）

結界石として、浄土寺の西と東に確認されている。



写真 結界石（西）



写真 結界石（東）

例2 正授院大日如来奉献塔

（長江一丁目、慶長2年（1597）、総高：2.71m）

銘文：「備州御調群（ママ）尾道浦道海居士」「慶長二年丁酉正■ 十二月吉祥日正真」
花崗岩製。道海は尾道浦町役人を務めた小川道海。大日如来坐像を彫刻。背部は舟形。

宝篋印塔

例1 重要文化財 浄土寺宝篋印塔（越智式）

（東久保町、貞和4年（1348）、総高：2.92m）

4名の逆修（生前に自分の死後、または年長者が若い死者の供養をする）と、光考らの追善（死者の冥福を祈り、功德を積む）のために建立。塔身と基礎の間にある、請花・反華の二重蓮華座の基台は備後南部・伊予地域の宝篋印塔に見られる特徴。基壇・基礎には多めの段数が、また基礎上部の曲線の集合・椀のような輪郭をもつ格狭間が装飾性を豊かにしている。南北朝期を代表する塔。



例2 重要文化財 浄土寺 伝足利尊氏供養塔
(東久保町、南北朝時代、総高：1.88m)

花崗岩製。隅飾突起が少し外に反り返り、南北朝時代の特徴をのこしている。基礎に適確に刻まれた格狭間や安定感のある相輪など、全体的に均整がとれたつくりとなっている。



例3 重要美術品 万福寺宝篋印塔
(西藤町、貞治3年(1364)、総高：2.4m)

銘文：「右志趣者為 法界有情也 貞治三年甲辰
仲春十三日 大願主貞阿 大工行信」

花崗岩製。基礎の蓮花、格狭間、笠部の隅飾、塔身の造りが優れており、伊派と思われる石工の作塔としての規準となる。基礎上縁には中央に大きく複弁を1つ、隅にも大きな複弁を配し、複弁の間には小振りの複弁を刻出。また、基礎には格狭間が見られ、笠部の隅飾は輪郭付きの二弧を刻出し、輪郭内に蓮華座上に月輪がある。こうした装飾が大変優れており、伊派と思われる石大工の手による作塔として規準となり得るものである。



例4 尾道市史跡 弁天小島
(因島町原町、室町時代、総高：1.8m)

弁天小島の頂上に立つ。塔身に仏像を刻出。かつて弁天小島は薬師寺の飛地であった。



例5 尾道市重要文化財 光明寺石造宝篋印塔
(東土堂町、南北朝～室町初期、総高：2.02m)

寺伝では、道宗雙救上人開山塔とする。特別な人に対するあつい礼を示す場合に用いる、四方格狭間が見られる。



例6 尾道市重要文化財 地藏院宝篋印塔
(瀬戸田町沢、鎌倉時代末～室町時代、総高：1.75m)

基礎には三面に格狭間を飾り、塔身には金剛界仏の種子を刻んでいる。鎌倉末～室町にかけての塔の特徴をよく表している。生口氏関係の墓と推測される。

無縫塔

例 妙得寺無縫塔

(原田町、南北朝～室町中期、総高：72.3cm)



板碑

例 1 尾道市重要文化財 薬師寺板碑 (5基)

(因島原町中井津、室町時代、

高さ：1.6m、1.09m、1.08m、1.07m、1.1m)

室町時代初期から盛んになった十王信仰に基づき、死者の供養塔として造立。



例 2 尾道市重要文化財 明徳寺十三仏種子板碑

(因島三庄町、慶長4年(1599)、総高：1.31m)

銘文：「奉權大僧都宥遍 四七歳 逆修

慶長四己亥年 十月廿一日」

虚空菩薩像の梵字を刻印。明徳寺の僧宥遍が47歳の時、逆修のために造立。

例 3 妙宣寺板碑形墓碑

(長江一丁目、貞治3年(1364)、総高：1.67m)

銘文：「長恩山妙宣寺開基大覚僧正 貞治甲辰四月三日 造立并海岸沙門日延敬白」

一見、板碑に見えるが、上部に2条の線が見られないことから、「塔」としている。開山大覚大僧正の墓碑として日延が造立。

例 4 浄土寺釈迦三尊仏名号岩

(東久保町、元徳4年(1332)、総高：2.34m)

銘文：「元徳二二壬申年四月日 願主如願」

円相の中に、釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩を表す梵字を陰刻。元徳四年に如願が釈迦三尊を浄土寺山に彫ったもので、備後地域では最古の自然岩板碑。

例 5 正授院廻国塔

(長江一丁目、天正16年(1588)、総高：2.38m)

銘文：「十羅刹女 備後州住至崖道海居士 下総州日空上人六十六部正得」「三十番神 下総州賢蔵坊六十六部中将」「天正十六戊子八月日萬事皆如■(夢の夕がヒ)」

「奉納大乘妙典一國六部成就」

小川道海が造立。六十六部として、書写した法華経を全国六十六カ所の霊場に一部ずつ奉納しながら諸国の社寺を回った際にこれを建立。

磨崖仏

- 例1 尾道市重要文化財 千光寺阿弥陀三尊磨崖仏
(東土堂町、寛正2年(1461)、総高:(岩の高さ)1.2m、
(像高)43.5cm、44cm、47cm(勢至菩薩・阿弥陀如来
・観世音菩薩の順))

勢至菩薩・阿弥陀如来・観世音菩薩を彫刻。三体の光背を舟形に彫り下げ、薄肉彫りにしてある。一部に朱色が残っており、造立当初は彩色されていたものを思われる。



- 例2 尾道市史跡 地藏石(鼻の地藏)
(因島三庄町三ヶ崎、慶長4年(1599)、
総高:5m)
銘文:「慶長四年 春心道喜禅定尼 卅一歳阿摩■」
「奉造備後因島 金山■松 室江可逆修
八月廿四日」

延命地藏菩薩坐像を刻出。この地藏に詣り小石を持ち帰ると子を授かり、安産も叶うとの言い伝えあり。



- 例3 尾道市重要文化財 千光寺逆修塔(2基)
(東土堂町、天正17年(1589)、総高:1.41m)
銘文:「松巖■■禅定門 松溪妙通禅定尼 天正十七年己丑 二月時正 逆修」
「阿性禅定尼送(マ)修 天正十七年己丑二月廿五日」

花崗岩製。舟形の石に1基は二尊仏を、1基は一尊仏を自然岩に彫刻。ともに逆修目的。

水船(石曹)

- 例 尾道市重要文化財 光明坊水船(2基)
(瀬戸田町御寺、総高:60cm・40cm)
花崗岩製。大:上縁一部欠損。一石から作られている。底に水抜け穴あり。

小:4枚の石を組み合わせて作製。



底に水抜け穴あり。

(■は解読不明文字を示す。)

2 石造物が語る歴史

石造物は美術品としての価値も有しています。宝篋印塔などは、相輪から基礎まで細部にわたって細かい装飾が施されています。先に紹介したように、西藤町の万福寺宝篋印塔は造立当時の特徴的な装飾が遺っていることが評価され、国の重要美術品に指定されました。石造物は、様々な視点から考察が可能ですが、ここでは以下の3つの視点から石造物が語る歴史を読み解いていこうと思います。

①石造物の‘銘文’

石造物を造る人々を「石工」と言います。文政5年(1822)の史料には、その技術が買われ、広島城下町の形成にあたって多くの尾道石工が移住したという記述があります。また尾道で造られたものは全国的に有名となり、彼らの手によって造られた石造物は、福山や三原など尾道の周辺はもちろん、愛媛県や新潟県まで広がっています。

高い技術力をもった石工たちは、近世に入って突然登場してきたとは考えられません。しかし中世の尾道の石工に関する史料はあまり遺っておらず、詳細はよくわかっていません。そこで手がかりとなるのが、石造物に刻まれた‘銘文’です。

石造物の中には製作者名や作製年月日、目的などが刻まれていることがあり、これを銘文といいます。瀬戸田町の光明坊にある重要文化財に指定されている十三重塔の基壇には「石工心阿」と刻銘されています。心阿の名は三原市の宗光寺七重塔、兵庫県朝来郡の鷲原寺不動尊、神奈川県箱根山中の宝篋印塔、神奈川県鎌倉市の安養院宝篋印塔にも遺っています。

この「心阿」という人物についての詳細は分かっていません。しかし、安養院・鷲原寺・光明坊には、西大寺の僧叡尊の弟子良観(忍性)が訪れているという共通点があります。光明坊の寺伝では、忍性が十三重塔を造立したと言われています。

叡尊は奈良の西大寺という寺の長老を努めた人物で、文永11年(1271)の蒙古襲来のおりには祈祷により敗退させたと云われています。彼は人々の「二世安楽」、つまり現世だけでなく来世の安穩も祈り活動を続けました。忍性ら彼の弟子はこの教えを継いで、各地で勧進活動を行いました。そして多くの人々が「二世安楽」を願い、私財だけでなく労力も投じて、寺や石造物の造立に参加しました。しかし寺を建立するにも、石造物を造るにも僧だけでは困難です。そこで活躍したのが石工技術を持った伊行末を祖とする伊一派でした。叡尊の教えを拡めるべく各地に赴いた弟子たちには、こうした石工集団が随行していたと思われます。

ここまで整理した上で、改めて心阿について考えてみます。心阿作の石造物が遺っている寺には、いずれも西大寺の僧侶の足跡がうかがえます。また、先に西大寺と伊派の関係を確認しました。これらのことから、「心阿」は僧に随行した石工集団の1人だったのではないかと推測できます。つまり、光明坊十三重塔の「石工心阿」という銘文からは、高い技術を備えた石工が尾道に先進技術をもたらし、後にこの地に定着していったことが考えられるのです。

②石造物の‘形状’

西國寺の三重塔脇にある五輪塔は千光寺山城主・杉原氏元恒の墓との伝承がありますが、14世紀まで溯ることができ、伝承と一致しないと言われています。この五輪塔と、今高野山塔の岡五輪塔（世羅町）、福善寺五輪塔（長江）、石手寺五輪塔（愛媛県）の特徴は、大和西大寺奥之院の叡尊五輪塔と共通しています。叡尊五輪塔は、鎌倉時代後期を代表する西大寺系五輪塔の祖形とされています。この五輪塔を忠実に踏襲しようとしたのが定證です。定證も先ほど紹介した叡尊の弟子の一人で、浄土寺を瀬戸内における西大寺律宗の中心的寺院としようとして尽力しました。定證は尊崇する叡尊の墓塔を強く意識し、叡尊墓に似せて定證自身の墓も造ろうとしたと思われます。この思いから造立されたのが浄土寺墓地にある花崗岩製の大型五輪塔です。

西國寺の三重塔脇五輪塔は、この定證五輪塔に近似しています。通常長方形に地輪を造るのに対し、両五輪塔ともすそが広がっています。このように当時尾道周辺では、師にあやからうと定證五輪塔を契機に叡尊墓を模倣しようとする動きがあったと考えられます。

また、歴代住職の墓と言われている西國寺墓地五輪塔（いずれも南北朝時代末、もしくは室町時代初期の造立と推定）の地輪もすそを広げており、一連の形式が連続して見受けられます。このように「一定の技術的系譜のもとに継続して造立され」ていたということは、近世に広く展開した尾道石工の成立を考える上で注目すべきことです。つまり、南北朝時代～室町時代初期には尾道の石工集団が成立していた可能性があるのです。この背景には、良質な石が入手しやすかったという環境的な利点だけでなく、心阿のように近畿から優れた技術を持った石工を呼び寄せるなどして、造寺・造塔に不可欠の石工技術がこうした背景の中で定着していったと推測されています。



西國寺墓地歴代住職五輪塔



浄土寺定證五輪塔



西國寺三重塔脇五輪塔

③石造物のある‘場所’

全ての石造物に銘文があれば、その石造物の性格を知ることができます。しかし現在遺っているものは、例え銘文があっても長い年月の間に風化してしまい、はっきりと見えないものがたくさんあります。そこで手がかりとなるのが石造物のある‘場所’です。

御調町中原には、宝篋印塔の笠部や五輪塔、石仏などの石造物群が遺存しています。その

中に交じって1基の板碑があります。この板碑は、造立者であると思われる宥賀の名と「天正十四祀 丙戌十月日」という造立年が確認できます。しかし銘文を確認できても、宥賀がどういった人物であるか不明のため、これらが何のために造られたかは、石造物だけでは知ることはできません。そこで鍵となるのが、この石造物群がある場所です。

中原は大町の東北に位置します。大町といえば、Ⅲ章で紹介した森光新四郎景近の城と伝わる牛ノ皮城跡がある場所です。牛ノ皮城に近い中原には、かつて森光氏の菩提寺である先源寺という寺があったと伝えられ、これら石造物群は城主の墓ではないかと云われています。

また、御調町市には本照寺という寺があり、裏手には天正5・6・14年の年号を確認できるものなど、全19基の五輪塔が遺っています。この寺は、市の南西に位置している雲雀山城主・池上氏の菩提寺でした。雲雀城は山頂に築かれていましたが、平素城主は山麓の居館におり、その居館が本照寺付近と考えられています。以上のことから、これらの五輪塔は、雲雀城城主池上氏の墓と伝えられています。現在は尾道市史跡に指定されています。

ただし、この2例は山野に埋もれるなどしていたものを後に一ヶ所に集積したものであり、あくまで推測の域を出ません。しかし、このように石造物が何故そこにあるのかを考えることで、その石造物の性格を知る手がかりとなります。



伝 雲雀城主墓石群

また、中世の城跡周辺だけでなく、寺社にも数多くの石造物が存在します。寺社は、人々の信仰の拠り所というだけでなく、聖域として、武家勢力などの力が及ばない場所でもありました。そうした場所に石造物を置くことは、人々の信仰を深めることであり、神仏に対する敬意を表すことでもありました。そうした行為は、現在の寺社でもみることができます。そうした石造物は、寺社の歴史そのものであるとも言えます。

このようにさまざまな角度から光をあてることで、石造物はいろいろなことを教えてくれます。与えてくれる情報と時代背景を考え合わせることで、今まで知られていなかった歴史の一部を解明することができます。中世に形成された石工たちの礎を見出せたことは、尾道の歴史を知る一歩となりました。今後もこうした石造物の調査研究を続けることで、これまで明らかにされなかった尾道の歴史が解明される可能性があります。